

「妻の話を聞く」実践を通して、妻の心を素直に受け入れられるようになり、夫婦の絆を取り戻した二つの事例を紹介します。

A社長は結婚して四十年。この間、自分の思い通りに会社を経営し、家庭生活を営んできました。当然、妻に相談をしたり、話を聞いてあげるといったことは一度もありませんでした。A社長にとっては、こうした生活が当たり前のことでした。

その後、倫理法人会に縁があり入会。学びを深めていくうちに、徐々に自分自身を冷静に振り返ることができるようになりました。何もかも自分の思い通りに行動してきたが、妻はどんな思いで受け入れてきたのだろう。妻の話を心から聞くことなどなかったが、妻には随分我慢を強いてきたのでは。こんな勝手なことばかりしてよくここまで大きな問題が起きなかったものだ。A社長の心が変わり始めた瞬間でした。

そして意を決して始めた実践が「妻の話を聞く」ということでした。決意したものの、なかなかすんなりとは実践できませんでしたが、三カ月も経過すると妻の話を何とか聞いてあげられるようになりました。

そのようになって一番喜んだのは妻です。A社長からの一方通行の話を聞くだけだった妻が、長年溜め込んでいたものを一気に吐き出すように話し始めたのです。

「このまま進んだら妻はいよいよ調子に乗ってしまうのでは…。ちよっと恐怖です」と言うA社長でしたが、その表情には妻の心を受け入れることができるようになった喜びが満ち溢れていました。



聞く実践の要諦は 心からすぐ聞くこと

B氏は出張の帰りが遅くなるといつも妻に駅まで迎えに来てもらっていました。車に乗り込むと、妻はすぐに留守中のいろいろな出来事を喋り始めます。疲れているB氏は「今、そんなに喋らなくてもいいだろう。家に着いてから聞いてあげるから」と対応していました。妻は話を聞いてもらえなかったことが何となく不服のようでした。家に着いて「ところでさっきの話はどういうこと」と聞くと、妻は「もういいわ」とそっけなく答えるのです。

同じようなことが繰り返されたある日、B氏はフツと気づくことがありました。話は相手が話したいと思っただけの時に聞いてあげないと本当に聞いてあげたことにならないのではないかと。妻もきつとあの車の中でこそ話を聞いてもらいたかったのではないだろうか。

以来B氏は、どんなに疲れていても、また忙しくて、妻から「話を聞いてほしい」と言われた時が一番大事な時と受け止め、真剣に耳を傾けるようになりました。すると妻も「疲れているところを「ごめんなさい」と言いながらも、思いのすべてを嬉しそうに語ってくれるようになったのです。

以上、二つの事例から、人の話を聞く時には「心から聞く」「すぐ聞く」ということが大切であると教えられます。周囲の人(特に身近な人)の話に「真剣に耳を傾けているのか」「あと回しにしているか」を改めて振り返り、「聞く実践」に徹していきましょう。